

生徒と共に、教師と共に創りたい

「探究」のあるこれからの学校

すでに始まっている探究モードへのシフトチェンジ。

現場の先生方は、そこにどんなやりがいや期待を感じているのでしょうか。

授業者として、管理職としての思いを寄稿していただきました。



いきいきと活動に取り組む生徒に伴走し 探究が楽しくなってきました

松井孝夫 (群馬・県立中央中等教育学校)

まついたかお ● 1992年、群馬県の生物科教員に。1997年、自然環境科が設置された尾瀬高校に異動。地域の自然をテーマに学ぶ理数系探究の実践を重ねる。学習指導要領解説(総合的な学習の時間)を1冊めし、環境、ESDに関する研究協力者等の公職を歴任。現任校では研究部長やSGH主任として総合的な学習の時間や課題研究を推進し、現在は大学院生として「避雷教育」をテーマに自らの探究を実践している。

探究がおもしろくなってきた。最近、そんなふうになるようになりました。以前は、正しい手法を教えて、いい成果を出せるよう、しっかりと指導しなければ、と考えて、肩に力が入っていたのかもしれませんが。少し古いエピソードですが、きっかけとなったA君のことを紹介します。

尾瀬高等学校の自然環境科(理数科)で課題研究を担当して5年目、今から15年も前のことです。鮮明に記憶している「探究」があります。A君の研究は、近所にある小さな湿原とその周辺の自然環境調査でした。進めるうちに地域住民への湿原の利用についてのアンケート調査をし、植栽の是非について研究機関に問い合わせをするなど、次第に理科研究の範疇を超えていきました。生き生きと発表するA君を見て、次から次へと現れる課題を追究する楽しさが伝わり考えが変わりました。そして、これが探究だ!と思うようになったのです。

最近のことでは、現在勤務している群馬県立中央中等教育学校のK君

やO君の探究が印象に残っています。「地域に根差したサッカーチームの存在意義」をテーマにグループ研究に取り組んでいたK君。試合の応援やサポーターのミーティングなどに十数回も参加し、県内や国内はもちろん、海外でも調査を行い、啓発活動も行うなど、授業時間外での活動が多岐にわたり充実していました。自分にとって重要で切実な食物アレルギーの問題を扱ったO君も、身近な課題をどんどん見つけ出し、何かを発見することが日常であり、趣味のようなものになっていきました。

「探究というのは、遊びと学びの境界線が限りなく薄い活動のひとつだと思う。不満を解決したり、もっと面白くしたり、もはや生活の工夫のような存在だから、どこまでもいかに楽しむかを考えるだけでいい」と言うO君。彼はまた、「自分が発見したことを誰かに話す楽しさ」もあると言います。他の生徒も同様に、探究を通した「人とのつながり」「人との関わり」にもよさを感じているようです。

探究がおもしろいと私が感じるのは、探究する生徒に疑問を投げかけてやりとりして、生徒の探究を理解したとき。そしてそれは、「生徒とのつながり」ができたというときでもあります。

生き生きと行う探究は、「自分にとって切実な課題」に出会うことから生まれます。だからこそ生徒にとって有益な探究課題である「ひと・もの・こと」に出会う機会や場を作りたい。さらには、充実した探究が自律的に行われるようにするために、教科・科目での探究の指導を充実させたいと考えています。そのために現在は、すでに探究モードにシフトしている他校の先生との「探究の会」を開催し、悩み相談や情報交換等を行っています。そして、探究を通した「つながり」のよさを実感するとともに、自らのモチベーションを高めています。

探究モードにシフトしている先生、シフトしようとしている先生は、きっと身近にいます。生徒同様、主体的・協働的に、楽しみながら「探究の指導」を探究していきましょう。